



Title	編輯を終へて
Author(s)	山本, 楢信
Citation	懐徳. 1943, 21, p. 48-50
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/89108
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

の哀辭を左に掲げて置きます。

哀辭

圖ラン忽チ計ヲ聞ク、往年ノ感荷ヲ想ヒ悼惜
ノ至ニ堪ヘズ、茲ニ慶シテ哀誠ヲ布ク。

編輯を終へて

幹事 山本 檜信

嗚呼公世家ノ休光ヲ掲ゲ、其ノ德厚ク其ノ勳
隆シナリ、曩ニ公阪府ニ尹タリシ時、敵會ガ
舊庠ヲ重建セント欲シテ、狀ヲ具シテ稟陳シ、
公地ヲ假ランコトヲ請フヤ、公ハ欣然トシテ
之ヲ府會ニ諮リ、即チ允許ヲ賜ヘリ、爲ニ敵
會ノ經營亟ニ成リ、絃誦復タ興ルヲ得タリ、
是レ偏ニ公ガ學ヲ好ムノ懲徳ニ賴ルモノニシ
テ、其ノ鴻恩永ク敵會ノ忘レザル所ナリ、而
シテ公冠ヲ挂ケテ京ニ還ルト雖モ、公ハ其ノ
評議員タル故ノ如ク、時ニ教言ヲ賜ヒ、マタ
新年ノ讌、公洛ニ在レバ必ズ駕ヲ枉ゲ、竊ニ
樂ム所アルモノノ如シ、敵會モ亦其ノ警歎ニ
接シ、壽ノ彌高カラシコトヲ祈リシニ、詎ダ

畏みて大御心を奉體し、億兆一心、全力を盡
して、自惚の強い敵國米英の非望を根こそぎ叩
きつぶし、以て大東亞共榮圈體制を確立して、
皇威八紘に治き世界を顯現し、唯々宸襟を安
んじ奉らんことを念願するのみである。此の大
事に挺身すること、大海の一粟の如き、みたみ
われらの存在を、無窮の生命に顯揚する、唯一
筋の道である。

盡忠至誠の將士は、風行雷動、求敵必殺の威
武を發揚し、寒風怒濤の中、或は酷熱彈雨の下

粉骨碎身、黙々として各其の任を完うし、不惜
身命、遂に國に殉じて散華せる英魂は、護國の
神靈となりて悠久の大義に生く。長城に照る月
も、ガンヂス河に宿る月も、月に變りなく、南
の空に戰死された山本元帥の心も、アツツ島に
玉碎された一兵卒の心も、國を思ふまごろに
二つはない。將兵は、巨大な一つの火の玉とな
つて戰つてゐる。

一億銃後の臣民は、將兵の尊い犠牲を心に銘
記し、一發の彈、一臺の飛行機でも、より多く
戰線に送るべく、一粒の米でも、より多く作る
べく、精魂を傾け、黙々として働くて、日本を
守つてゐる、其の尊い姿を、工場にも農村にも
到る處に見受けらるゝ今日、千里の道も萬里の
波濤も意に介するに足らない。萬難交々襲ひ來

りて、太平、印度兩洋の波、如何に荒るゝとも
日本は必ず勝つ。東亞の危機に大東亞を護るた
め、身を挺して刻苦し、率先垂範、眞つ先に飛
び込めば、道自ら開け、十億東亞の民衆は、日
本の信義に頼るやうになつて來つゝある。神慮
洵にかたじけなき極みである。

此の戰爭に勝つためには、石に喰りついても
頑張らねばならない我等は、純潔を必要とする
と同じやうに耐乏を必要とするが、耐乏の生活
には無上の喜悅を發見する。其の心の糧は眼か
らも耳からも攝取される。道義大阪の根元とし
て、世道人心に貢獻して居る本堂將來の使命の
重大なる事をを痛感する。

本堂關係諸先生の論說と關係記事とを掲載し
て刊行する本誌は、號を重ぬること二十一、茲に

國學の權威、澤瀉久孝先生、並びに本堂先賢の後裔羽倉敬尙氏及び會員諸子の玉稿を掲げ、附するに本堂及本會の記事を以てした、世界戰亂の今日、本號を漸く刊行し得るは、全く聖代の餘澤にして、只管 聖恩の有難さに感泣する。

早春の候、高齡とはいへ猶矍鑠、日常より百歳壽命説を主張されてゐた中井木菟麻呂先生を喪ひ、堂友集ひて天満橋畔の會堂に其の靈を弔ひしに、盛夏の頃、またもや本堂再建の恩人大久保利武侯爵の薨去に遇ふ、眞に哀悼の至に堪へない。故永田理事長の遺命に隨ひ、太田幹事、會員を代表して上京し、告別式に列し、哀辭を捧ぐ。謹みて兩先生の御冥福を祈る。

終りに、諸先生の御鞭達と堂友諸兄の御健闘とを祈る。

